

## 第2章

# 太田陸郎——文化的關心

一九三九年一月、『旅と伝説』（二二二）に「進軍中にみた支那習俗（二）」という一文が載せられている。執筆者は「中支派遣軍 片村部隊、北尾部隊気付太田（陸）部隊、太田陸郎」であった。

「以下は武漢攻略戦に参じて進撃した一兵たる、自分の触目した中支奥地方面のゆきづり、否より以下の触目した機会の随筆にすぎない」と断りながら、九頁にわたって「都鄙文化の差」「農村雑感」「植物雑抄」「動物雑抄」「漁業寸記」「埋葬見聞小記」などの内容を、手描図五枚と写真二枚を入れながら記している。

この号の「後記」では、「遙かの第一線から太田陸郎氏の寄稿がありました。感に耐へません。早速本誌と諸雑誌をとりまとめ、慰問品として送つて置きました。各位も何卒心がけてやつて下さい」という読者への呼び掛けが見られ、さらに翌月、『民間伝承』四一五の「紹介と批評」においても、倉田一郎が「兵馬倥傯（びょうまこうげん）の間の観察乍ら興味ふかく、いはばフオーコロリックな『麦と兵隊』として注目されよう」と会員の注意を促している。

その後、太田陸郎は三月に「進軍中にみた支那習俗（二）」、五月に「中支奥地の鵜飼」を次々と投稿し、一九四

二年十一月まで『旅と伝説』に文章や通信を十二回も寄せていた。一方、一九三九年六月『民間伝承』に「戦地にも春がまわりました」との初通信を寄せて以降、ほぼ二ヶ月に一回の頻度で通信を送っていた。その回数と文章の長さはともに会員の中でトップであった<sup>(1)</sup>。

太田陸郎は軍人として中国に赴いたが、それまでは地方公務員、何より民俗学者として活躍していた。柳田国男最晩年の回想録『故郷七十年』には、「太田陸郎君のこと」という一節がある。「播州出身の太田陸郎君は、惜しいことに戦争中、台北で死んでしまつたが、播州のためにかなりつくしてくれた人であつた」と惜しむ気持ちを隠さなかつた。

『故郷七十年』は単行本として発行される前『神戸新聞』で連載されており、播州出身者があげられたのは自然ななりゆきかもしれない。しかし、その前に柳田は既に、太田の遺著『支那習俗』のために序文（一九四三年九月）を寄せており、戦後まもなく刊行された『新国学談第二冊 山宮考』の「帰らざる同志」（一九四六年六月五日）にも、太田のことを悼んでいる。柳田によつて回想された者は大勢おり、「帰らざる同志」と言わしめた者も、他に小林伝十、小島勝治などがいるが、文章という形で合計三回も回想された例は、管見のかぎり太田が唯一であつた。

あれほど柳田に深く惜しまれた太田陸郎は戦後、川島右次「太田陸郎」（一九五一年）<sup>(2)</sup>、沢田四郎作「太田陸郎伝」（一九五八年）<sup>(3)</sup>などの紹介があるものの、六十年代以降、次第にその存在が忘れられていった。一九九〇年代に再び思い出され、吉田隆英の「長江中流域の生活と民俗…太田陸郎の中国民俗の研究について」（『姫路独協大学外国語学部紀要五』一九九二年）と加茂幸男の『太田陸郎伝——民俗学者太田陸郎を語る玄圃梨の記』（私家版、一九九二年）などの先行研究が現れた。この中でとくに加茂の著作は、太田の長男・泰の岳父が保存していた「太田資料」を駆使し、太田の経歴、家族や友人関係を中心に記述しており、太田の人となりを窺わせるエピソードや貴重な一次資料などが数多く盛り込まれており、本論はそれに負うところが多い。しかし太田の記念に重きを置いたこ

これらの先行研究では、太田の業績と時代との関連、とくにその中国研究の日本民俗学にとつての意味などについて、まだ十分な分析に至っていない。

本章は、太田の『兵庫県民俗資料』から『近畿民俗』を中心とした活動、及び軍人として中国に赴いた後に『旅と伝説』や『民間伝承』に寄せた報告や通信などから、太田が郷土の先覚者から日本の民俗学者に変わる経緯、及びその中国経験の意味を検討する。

## 1 郷土史から日本民俗学へ

### 1 太田陸郎（おおた・ろくろう）<sup>(4)</sup>の略歴

一八九六年八月、六男として、夢前川上流域の兵庫県飾磨郡置塩村の役所所在地糸田に生まれる。父・名倉次は柳田の長兄松岡鼎と御影師範での同窓の友人であり、地元姫路で自由民権運動を展開し、県議会、衆議院議員、県と郡の農会会長などを歴任した名士である。

一九一一年、地元の名門校である兵庫県立姫路中学校（兵庫県立姫路西高等学校の前身）に入学し、寄宿生活を送り始め、キリスト教徒になる。

一九一六年、二七期生として卒業し、京都のキリスト教系の同志社大学政治経済部<sup>(5)</sup>に入学する。考古学に強い関心を示す。

一九二一年、法学部経済学科を卒業<sup>(6)</sup>し、四月に株式会社富島組に入社した。富島組は一八八四年に大阪商船会社専属運輸会社として設立されたもので、本部は大阪にあり、当時神戸、東京、若松にも支店をもち、国内外にわたる港湾運送事業を展開していた<sup>(7)</sup>。

同十二月、一年志願兵として福知山工兵隊<sup>(8)</sup>に入隊し、一九二三年三月除隊して富島組に復職したが、健康を